江戸時代の久留米で、抹茶ブーム？

久留米藩領の茶道文化

自ら茶陶器を制作し、茶道を嗜む藩主がいた！歴代藩主と茶道文化の関わりや、その文化が藩領内で息づいていくモノ語りを紹介します。

静かな和室で湯を沸かし、茶を点て、客人に振る舞う茶道の所作。何かの折に、見たり経験したりした方も多いのではないでしょうか。

この日本の伝統文化の一つである茶の湯、いわゆる茶道は、江戸時代においては、武家社会の中で熱心に行われていました。江戸幕府による支配体制のもとでは、武士たちには政治能力や教養といったものがより必要とされるようになり、特に茶の湯は、大名たちの人間関係を円滑にする政治手段の一つとして重視されたのです。

今回は、久留米藩における茶道文化について、藩主をめぐるエピソードや資料を交えて紹介します。

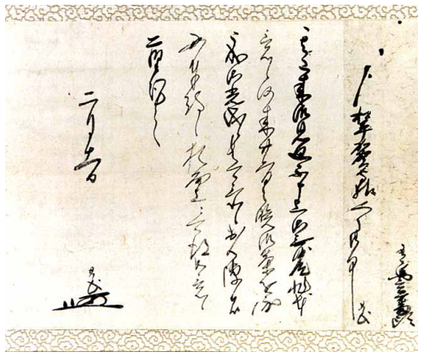
褐釉四耳壺（呂宋壺）　銘「小烏茶壷」（篠山神社所蔵）

1 茶人だった初代豊氏

久留米藩の茶の湯は、久留米藩初代藩主・有馬豊氏が、千利休の門下で**優れた武将十人を称する「利休十哲」の一人**に数えられることから始まります。豊氏は太閤秀吉から信頼され、また茶道に堪能であったため、太閤の茶室にあった珍石「千鳥石」を賜ったこともありました。

豊氏が、徳川３代将軍家光に近侍した堀田正盛に宛てた書状が残っています。内容は、２月22日の晩、自邸での茶会に招待したいというものです。旧暦の２月下旬は、現在ではおよそ桜の季節にあたります。大事な客人を招く春の宵の茶会に、豊氏は茶道具や茶室のしつらえに趣向をこらしたことでしょう。**豊氏が得意の茶道を通して、様々な人物と交流を深めていた**様子がうかがえます。

豊氏が秀吉から賜ったという珍石は、現在では確認できませんが、有馬家に伝わった古い茶壷があります。ルソン（現フィリピン）を経由して日本に渡来したことから、呂宋壺と称される茶壷で、本来は茶葉や香辛料を入れる輸送用の陶器でした。堂々たる風格から「小烏茶壷」という銘があり、１７０５年には、幕府御用職人により名物と鑑定されました。名物といった**貴重な茶道具を持つことは、大名にとって家の格式を示す重要なことでした。**



有馬豊氏書状（久留米市教育員会所蔵）

2 藩領内に広がる茶道

３代藩主・有馬頼利の頃になると、幕府で茶事にあたる職務として茶道頭が定められ、地方各藩にも**茶道方**などの職務が定められました。**４代藩主・有馬頼元**は、寛文年間（１６６１～１６７３）、筑前の人**野田俊益**を茶道で召抱えています。俊益は、福岡藩主黒田家の茶道頭を務めた土屋宗俊の門人で、その頃多くの弟子を持っていました。

また、延宝・寛保年間（１６７３～１７４４）の久留米藩士・戸田早雲が記した『久留米見聞録』には、

> 大身之衆ニハ数寄屋有之候。毎年宇治茶を申遣、口切り之茶湯なども有之候。小身之面々も宇治より茶を取寄、其時分ハ小身者も煎茶ハ無之候。在町も挽茶を用申候。

と、領内の茶の湯の様子を書き残しています。

　士分のほか町人や庶民も宇治から取り寄せた抹茶を楽しみ、身分の高い藩士は自邸に茶室を設けるほど、**久留米では茶道が流行**していたのです。

　江戸後期になると、茶道は武士が身に着けるべき教養として、特に藩士の間で広く行われました**8代藩主・有馬頼貴**（よりたか）の時に再築された藩校明善堂が、１７９６年に開校されると、毎月３の日に、諸礼故実（伝統的な武家の礼儀作法などの研究）に併せて茶道が教授されました。

　歴代藩主随一とも言われる風流人ぶりを発揮した**9代藩主・有馬頼徳**（よりのり）は、茶道においては自ら茶碗や水指などの茶陶器を作るほど熱中しました。それらは**柳原焼**（やなぎはらやき）と呼ばれ、開窯に際し、表千家不白流（ふはくりゅう）の３代・**川上宗寿**（そうじゅ）を招いて、指導を仰いでいます。

　柳原焼は、藩の財政難から短い期間で廃窯となりますが、様々な地方の茶陶を手本とした作品は、陶工や陶土までこだわりぬかれ、今日でも珍重されています。多くは高台に「柳原」の陽刻・陰刻や、「成」の字を基にした頼徳の花押などがあります。

柳原焼　黄釉肩衝茶入（おうゆうかたつきちゃいれ）
（久留米市教育委員会所蔵）

3　今に続く久留米の茶道

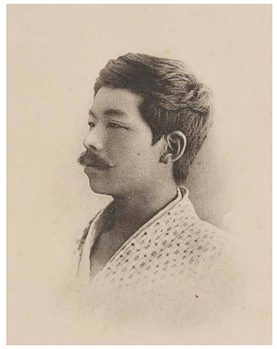
　ともに１８８２年、旧久留米藩士の子として生まれた洋画家、**青木繁と坂本繁二郎**のふたりにも、久留米の茶道文化との関わりを見ることができます。

　久留米市京町にある坂本繁二郎生家は、１９０２年当時の姿に復元工事が行われたものです。

坂本繁二郎生家

生家には、青木繁が居候した茶室も復原されています。坂本や青木が暮らした当時は、茶室という空間が身近にあったのです。

　青木繁については、「僕の家は代々藩の御茶道で、父は次男ものであった。」と自身が述べたように、**青木家は久留米藩の茶道役を務める家柄**でした。繁の祖父の与作は宗龍と号し、その祖父が青木家最後の、久留米藩お抱えの茶人だったようです。明治期を代表する洋画家・青木繁の父方のルーツが、久留米藩の茶道につながることは、とても興味深いものです。



青木繁
『青木繁画集』
（大正２年 政教社刊）より

　今回紹介した「モノ語り」を体験できる展覧会を開催します！

　有馬記念館で開催する**久留米入城 400 年記念企画Ⅲ「久留米藩領文化 - 祈りのかたち・風雅の心 - 」**では、今回ご紹介した有馬家ゆかりの茶道具のほか、書画や工芸品を展示しています。こちらの記事と合わせて、ぜひお楽しみください！

会　　期：令和 3 年 12 月 11 日（土）
**　　令和 4 年　4 月　4 日（月）**
休 館 日：毎週火曜日
**　　年末年始（12 月 28 日～ 1 月 1 日）**
時　　間：10 時～ 17 時
会　　場：有馬記念館

　有馬記念館１階「レストラン有馬」では、筑後川を眺めながら抹茶をいただくことができます。江戸時代から今につながる久留米の茶道の歴史に思いを馳せながら、一服楽しまれてはいかがでしょうか。（要予約）

レストラン有馬

令和３年 11 月１日　◆発行／久留米市教育委員会
◆問合せ／久留米市市民文化部文化財保護課
TEL：0942（30）9322 ／ FAX：0942（30）9714 ／ E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp